



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

清水赤十字病院

広報誌

ペケレベツとは

アイヌ語で「明るく清らかな川」を意味しており、清水町の由来となっています。



ペケレベツ



清水赤十字病院

院長挨拶 トピックス

精神科・心療内科紹介

赤十字フェスティバル開催！

講演会

パークゴルフ大会

炊き出し訓練

訪問介護ステーション

清水赤十字での思い出

人事消息

理念・基本方針

編集後記



撮影者：荒木 憲昭 成田 圭亮
撮影場所：清水町



STAYING ALIVE : 生き続けるための“3秒”

病院長
藤城 貴教

あるうことか、清潔な水と安全がタダ同然で手に入るこの日本で政治家が銃撃死する事件が起こった。

人間の命を預かる者として故人のご冥福をお祈りする。

その昔、日本赤十字社の国際救援要員は派遣準備として危機管理研修(初・中級)を受講する必要があった。和歌山城近くのホテルで講義を受け、土地勘のない和歌山市内をGPSだけ頼りに彷徨い歩き予め指定された座標を探す、或いは観光客の白い眼をよそに城内で匍匐前進(ほふくぜんしん)しながら敵の銃撃から逃れる訓練など徹底的に危機管理を叩き込まれたのである。早朝、VHF無線の交信練習に始まり、深夜(朝方?)まで続く“意見交換会”で終わる充実した訓練であった。ある研修生が終了後に感想を述べて曰く“私はこの研修中に3回撃たれて死にました!”と。

ある日の講義の最中のこと、何の前触れもなく3人の外国人武装勢力(実は講師の先生方)がマシンガンを水平に構えながら部屋に乱入、何やらわめき散らしている。かねて教わった通り身を床に伏せ頭を下げ、手を頭の後ろに組んで息を潜めそっと辺りを窺う。頑丈な遮蔽物があれば慎重に移動し隠れる。これが突然の銃撃から身を守るスタンダードであると教わった。赤十字国際委員会(ICRC)の発行する安全確保と危機管理ガイドラインの小冊子“STAYING ALIVE”にはこうある、「あなたが狙撃されていることが明らか時には、道路から外れた物陰に飛び込むくらいしか選択肢はない。(中略)次善の策は、ただ狙撃者から見えないように身を伏せることだ。何もしないよりはましである。」ものの3秒もあれば十分にできる護身なのである。

さきごろ、参加した学会場の隣にそびえる国宝松江城を見学した。天守には侵入者に打撃を与えるための“石落とし”や“矢狭間”“鉄砲間”などの仕掛けが張り巡らされ、城の周りを囲む武家屋敷の街並みは今も整然と残り質実剛健な松江の歴史を物語る。小泉八雲が愛したこの町も例外ではなく、ひと昔前、封建時代の日本ではあちこちで武器を使った争いがあり武力から身を守ること間違いなく日常生活の一部であった。

新興感染症が世界を席卷して久しいが、我々は医療人として赤十字人としてあらゆる変化に対応する術を整えておかねばならない、そして最も大事なものは“3秒”、つまりスピード感をもって物事に対処することであろう。With コロナ、日常生活の中に危険が同居するそんな時代に我々は生きている。



新規開設 精神科・心療内科担当 山田英孝 医師紹介 !!

4月から内科、精神科・心療内科の診療を担当しています。

出身は福岡で、東京と大分で大学時代を過ごし、卒業後は大半を久留米大学で臨床と研究に従事しました。専門は精神医学で、研究では薬物依存の基礎研究を行い、臨床では認知症をはじめとする老年期精神医学を勉強しています。北海道に来る前は岩手県陸前高田市で4年間働き、この春に縁あって清水赤十字病院に勤務することになりました。

赴任と同時に精神科・心療内科の外来を開始し、新聞や広報誌に掲載されたこともあり、少しずつ受診も増えているようです。私が精神科医になったのは四半世紀以上前のことですが、当時は精神科の敷居が高く、相当の重症例か病状の進行した患者さんがご家族に連れられて渋々受診されることがほとんどでした。その後、精神医療を取り巻く環境も少しずつ変化し、軽症例や早期受診が増えているようです。かつては統合失調症、躁うつ病、神経症が精神科の三大疾患と言われていましたが、近年は不眠症やストレス障がい、認知症の患者さんが多いようです。

これまで西十勝地域には精神科や心療内科がなく、患者さんは帯広の病院を受診されていたと伺っています。「こんな些細なことで受診してもいいのだろうか？」と躊躇されることもあるかもしれませんが、些細なことでもいいのでメンタルヘルス全般について気軽に相談していただければと思います。



赤十字 フェスティバル

赤十字フェスティバル講演会を終えて

2年ぶりとなった“赤十字フェスティバル2022”、新型コロナウイルス感染症対策～with コロナ～というテーマで開催され、私は公開講座で当院における COVID-19陽性患者入院受け入れの現状と対策と題し、コロナ患者の入院受け入れを始めてから今日まで、病棟における感染対策について話しました。

コロナ入院患者と一般の入院患者を1つの病棟でどう対応しているか、その結果としてクラスターを発生させることなく現在まで経過しているということを伝えることができたのかなと思っています。

発表内容はさておき、私自身、今回のような人前で話をさせてもらう機会は今までになかったため、とても緊張し、聞きに来てくれた方々に視線を向けることはできなかったことが今後の課題だと感じました。それでも無事に(?)終わったことにホッとしています。

今回は拙い発表を聞きに来てくれた来場者の方や発表の機会を設けてくださった方々に感謝したいと思います。

2階看護師 後藤 靖興



パークゴルフ大会

看護師になって約2ヶ月。私は、何故かパークゴルフをしていました。看護学生時代の友人と情報交換をしていますが、この話をすると皆が揃って驚いた反応をします。私も例にもれず、戸惑い気味にフェスティバルに参加しました。この日、強く印象に残った事があります。それは、地域の皆さんが院長の顔を覚えていたことです。恥ずかしながら、私は地元の病院の院長の顔を思い出すことができません。私のこの感覚が多数派だと信じていましたが、清水町では違うのかもしれないと感じた出来事でした。さらに「私たちもいつかお世話になるかもしれない。その時はよろしくね。」という言葉地域の方から頂いた時、心がキュッと引き締まる思いをしました。私は「地域の利用者に信頼される病院を目指す」という病院理念の実践がもたらしている現状を、肌で感じた気がします。この経験を胸に、誠実に精一杯、働こうと思いました。充実した時間をありがとうございました。

2階 看護師 笹谷唯花



炊き出し訓練

リハビリテーション技術課
堀下 香織

5月28日の「赤十字フェスティバル2022」2日目で清水町赤十字奉仕団と日赤職員による炊き出し訓練を行いました。炊き出しではカレーライスを作り、同時開催されていたパークゴルフ大会の参加者様に振る舞われました。

開始時は雨が降りそうな天気でしたが屋外にテントを張り、その中で炊き出し用のかまどや大鍋を組み立てて炊き出し準備をしました。その後、清水町赤十字奉仕団の方々に方法を教わりながらカレーの食材やお米を炊く準備をして、調理を開始しました。カレーの食材を炒める際にガスがつかず焦る場面もありましたが、その後は順調に進み美味しいカレーライスを作ることができました。盛り付けや片付けは役割分担し、協力して行うことでスムーズに作業ができました。

今回3年ぶりの開催ではありましたが、無事に最後までやり遂げることができました。赤十字フェスティバルに参加していただいた方々、ご協力していただいた皆様に深く感謝申し上げます。



訪問看護ステーション 活動内容

訪問看護ステーション
藤田 寛

訪問看護をはじめたきっかけ

もともと急性期医療に携わっていましたが、放浪しながら地域医療を学び、様々な方と接してきました。その中で、訪問先の利用者に関わり「この人、かわいい。家ではこんな感じなんだ・・・」と思い、現在に至ります。病棟では、清拭、点滴・・・と病院の時間軸で動きますが、訪問看護では、利用者の時間で動きます。利用者宅に、1人もしくは複数名(多職種)で訪問し、利用者と家族にケアを行います。ケア中は利用者によく話すため、様々なことを教わります。関わりの中から、その方の生活力や大事にしていることがわかり、その利用者の歴史を感じる事もできます。利用者は、どの方も自宅ではとても活き活きとしており、日常の出来事はもちろん、思い出話など、無口だった方が楽しそうに話してくれます。「その人らしさ」を追求し、利用者にあった看護を提供できるのは、訪問看護の魅力だと感じています。ただ、訪問看護も良い事ばかりではなく、状況によっては訪問自体を拒否されたり、距離が近いが故に妄想の対象になってしまったりする事もあります。また、一人で訪問するため、アセスメント、判断能力が問われるのも難しい一面だと感じています。そのため、日々勉強、工夫をして・・・それでも難しい場合は、同僚や上司、ケアマネジャーに相談します。また必要であれば多職種でカンファレンスを行います。さらに病棟勤務ではなかった、看護加算や法律を意識して仕事をすることが増え、定期的に診療報酬が変わる為、追いつくのに苦労しています。また、地域性はあると思いますが、特に小さなコミュニティでは訪問看護という言葉自体の認知度が低く、「ヘルパーさんかい？訪問看護ってなに？」と聞かれることが多々あります。まだまだ発展する分野だと信じて、日々精進していきたいと思っています。



清水赤十字での思い出

福岡赤十字
松田先生寄稿

清水赤十字病院の皆さま、こんにちは。いかがお過ごしでしょうか？

福岡赤十字病院外科から2度目の派遣で1ヶ月間お世話になりました、松田圭央です。

これまで私は、藤城院長と同じく赤十字の国際救援活動に参加してきました。国際救援の場では、与えられた環境に応じて限られたものと人を最大限に活かし、創意工夫して仕事をするのが求められます。清水でも専門分野にこだわらず、そんな働き方を求められていたと思うのですが、前はそれに応えられずに終わったと反省しました。今回、あの時の自分にリベンジできたかどうかはさておき、私にとってはより清水を知ることのできた充実した毎日となりました。得意分野の手術で腕を奮えない不安はありましたが、これまでとは違う形で患者と向き合う時間を持つことができました。いろいろな方々のサポートのお陰で、それが叶ったことに心から感謝しています。

ここのところ、福岡は徐々に蒸し暑くなってきました。私が北海道に到着した3月15日は、飛行機が着陸できない可能性がアナウンスされるほどの吹雪に見舞われていました。桜開花直前の暖かい福岡を数時間前に出発した私は、その雪景色と寒さに圧倒されたのを覚えています。真っ白な雪原に並ぶ白樺、隊列をなして空を横切る白鳥達、雪解け水の雨樋から伝い落ちる音など、十勝の風景はどこを切り取っても美しかったです。食べ物も豊かでした。清水でお会いすることができた方々、起こったあれこれを毎日のように思い出しながら、再び清水で働ける日を待ち遠しく思っております。

それまで皆様、お元気にお過ごしください。ごきげんよう。



新人歓迎会 BBQ

3階看護師
中尾 百恵

コロナ禍で出来ていなかった新人歓迎会を、3年ぶりに開催することが出来ました。人数制限もあり、沢山の参加とはなりませんでしたが清水公園の解放感ある場所でおいしく焼肉を頂きました。肉は地元で大人気の辻屋精肉店で、口の中に入った瞬間とろける程のおいしさに感動してしまいました。

院長先生の乾杯で始まり、途中新人職員より(2020年～2022年入社の12名)1人ずつ、挨拶をして頂きました。皆さんの個性あふれるスピーチで、「お酒が大好きで機会があれば誘ってください」「カラオケの18番は〇〇」「好きな食べ物は〇〇」と心に残る素敵なアピールでした。

同じ職場でありながら、実際は挨拶程度にとどまるということが現状です。職場の良い関係を築ける1つの場所として他部署の人達と、親睦会を通して言葉を交わし考えを述べられるとても大切な機会だと考えています。しかしコロナ禍でその機会が制限されているのも事実です。今回の開催はノンアルコールでの焼肉で、ちょっと物足りないと思った方もいらっしゃると思いますが、次回の親睦会では、アルコールでもノンアルコールの方でも楽しめる企画を考え、沢山の方が参加できるように親睦会役員一同、頑張ります。



人事消息

医師派遣 福岡赤十字病院

4月18日(月)～5月13日(金) 松永 壮人
5月16日(月)～5月31日(火) 本山健太郎
6月1日(水)～6月30日(木) 大後 徳彦

内科専攻医 愛知医療センター 名古屋第二病院

5月9日(月)～5月31日(火) 近藤 光
6月2日(木)～6月29日(水) 伊林 諒

臨床研修医 愛知医療センター 名古屋第二病院

4月11日(月)～4月28日(木) 宮原 美奈
5月2日(月)～5月27日(金) 伊藤菜々華
6月13日(月)～7月8日(金) 北條 文慧

仙台赤十字病院

6月6日(月)～7月1日(金) 吉田 聡

医学生 旭川医科大学

4月 2名

編集後記

清水町に私の1番好きな季節がやってきました。

通勤途中にも満開の花があちらこちらに咲き誇り、気持ち良い風を感じる毎日です。

十勝地方で春夏秋冬を通して暮らしてみても、感じることは空の青さです。また、夜は晴れていることが多いせいか、星を見上げることが多くなりました。

これから夏本番になり、秋の到来を迎える頃には北海道には旬の美味しい食べ物が収穫される季節になります。その来るべき決戦の季節に備えて、少しでもダイエットしておきたい通勤途中のおじさんは少し早足になります(笑)

「花より団子」女性だけに使う諺ではないことを痛感した朝でした。

会計課 笹田 裕人

❖ 編集・発行責任者：上野 和久

❖ 編集委員長：首藤 竹司

❖ 発行元：清水赤十字病院

❖ 印刷：東洋株式会社

〒089-0195 北海道上川郡清水町南2条2丁目1番地 TEL 0156-62-2513 FAX 0156-62-4460

URL <https://www.shimizu.jrc.or.jp/> MAIL contact@shimizu.jrc.or.jp